



が何となく役に立ち、地域の中にある意欲的な農家さんと色々話すうちにグリーン・ツーリズム（以下、GT）、有機農業など魅力的な取り組みが次から次に目の前に広がってきた。

<米粉パンの開発>

米粉のパンの取り組みは、実はある農家の方の農業政策への不満から始まった。「補助金がないと採算が取れない転作作物はおかしい。米どころ福井は米を作るべきだ。ご飯で食べないなら米粉にして学校給食のパンにすればいい。米粉パン開発の取り組みを町でやってほしい。」という半ば怒りにも近い要望を役場へ持って来られたのだ。役場にいた時には決して言えなかったが、「もっともだ。」と心の中でうなずきながら、かと言って米粉パンの開発まではとても行政にできるはずがない。どうやってなだめたものかと思っていたが、気がつくとも市民公募でグループを作り取り組む羽目になっていた。平成15年5月に公募して当初30名で「とことんお米倶楽部

」と命名した米粉料理の研究グループが発足。  
年度末には40ものレシピを提案。研究用米粉とパン作り等に必要な家庭で使うレベルの道具を農産物加工研究施設で整えてもらい、それ以外の経費は自分たちで会費を集め、開発したレシピでイベントにバザー出展したり、講習会を開いたり、次の米粉に必要な資金を捻出するよう取り組んだ。2年目に入ると思いのある人たちで出資金を募ることも始めた。これは市民公募で取り組み始めたことの大きな効果で、製粉屋、パン教室の先生、米提供の専業農家など、様々な民間の方が加わってくださったので、自分たちで活動を継続できる準備を当初から仕込んでいたのだ。  
もちろん、行政マンだった私にはそんな発想はなく、事務局として「もっともだ」と思うことは段取りをさせてもらっただけなのだ。が、人の繋がりと個々の力を生かすことですので、ごいことが成し得るのだと目の当たりにした。今だから言えるが、担当者の名の下に好きな

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|
| こ | と | を | や | ら | せ | て | も | ら | っ | た | と | 感  | 謝 | し | て | い | る | 。 |   |
| く | 農 | 業 | ・ | 農 | 村 | の | 生 | き | 残 | り | 〉 |    |   |   |   |   |   |   |   |
| 平 | 成 | 1 | 2 | 、 | 1 | 3 | 年 | こ | ろ | か | ら | 、  | 言 | 葉 | と | し | て | 仕 |   |
| 事 | 上 | ち | ら | ほ | ら | と | 耳 | に | す | る | よ | う  | に | な | っ | た | G | T | 。 |
| 町 | に | は | 当 | 然 | な | が | ら | 担 | 当 | 者 | は | い  | る | は | ず | も | な | く | 、 |
| 研 | 修 | な | ど | の | 文 | 書 | が | 回 | っ | て | き | た  | 時 | 、 | 「 | 誰 | も | い | な |
| い | の | な | ら | 、 | 仕 | 方 | な | い | 私 | が | … | 。」 | と | ( | 内 | 心 | は | 興 | 味 |
| 津 | 々 | で | ) | 勝 | 手 | に | 担 | 当 | 者 | に | な | っ  | て | い | た | 。 |   |   |   |
| 当 | 時 | 、 | 農 | 業 | 政 | 策 | は | 大 | き | く | 変 | わ  | る | 転 | 換 | 期 | 。 | コ |   |
| ス | ト | ダ | ウ | ン | 、 | 大 | 規 | 模 | 化 | 、 | 集 | 落  | 営 | 農 | 推 | 進 | と | 、 | 小 |
| さ | な | 兼 | 業 | 農 | 家 | が | 農 | 業 | を | 支 | え | て  | き | た | 地 | 域 | に | は | な |
| か | な | か | 難 | し | い | 、 | で | も | 政 | 策 | に | 乗  | ら | な | け | れ | ば | 立 | ち |
| 行 | か | な | い | 状 | 況 | で | 、 | 集 | 落 | 座 | 談 | 会  | に | 出 | 向 | い | て | 「 | こ |
| れ | な | ら | で | き | る | 」 | と | い | う | 集 | 落 | 営  | 農 | の | 研 | 修 | を | し | た |
| り | 、 | 先 | 進 | 地 | 視 | 察 | を | し | た | り | と | 、  | い | ろ | い | ろ | 仕 | 掛 | け |
| て | は | み | る | が | 、 | い | っ | こ | う | に | 地 | 域  | は | 動 | か | な | い | 。 |   |
| 何 | か | 違 | う | 、 | み | ん | な | が | み | ん | な | 大  | 規 | 模 | 化 | ・ | 集 | 落 |   |
| 営 | 農 | じ | ゃ | な | く | て | も | 農 | 業 | を | 継 | 続  | で | き | る | 方 | 法 | は | あ |
| る | は | ず | だ | 、 | と | 思 | い | っ | つ | も | 、 | そ  | の | 何 | か | が | 見 | え | な |
| い | ま | ま | 、 | 「 | こ | ん | な | 知 | 名 | 度 | の | 低  | い | 、 | 売 | り | 先 | 確 | 保 |

も でき ない 福 井 ( 今 立 ) で は 、 何 を や っ て も  
無 理 や 。 う ら ( 私 ) の 目 の 黒 い う ち は 何 と か  
守 っ て も 、 息 子 の 代 に な っ た ら や め て し ま う  
だ ろ う 。」 と い う お じ い ち ゃ ん お ば あ ち ゃ ん の  
声 を あ ち こ ち で 聞 き 、 悶 々 と し て い た 。  
く ダ メ も と の 田 ん ぼ の オ ー ナ ー >  
あ る と き 、 1 0 年 以 上 有 機 農 業 を や っ て こ  
ら れ た 農 家 の 方 と 話 を し て い て 、 「 福 井 ( 今  
立 ) は ほ ん と に 知 名 度 が 低 く て 、 よ そ か ら 人  
に 来 て も ら え ない と こ ろ な の か ど う か 、 や っ  
て み よ さ 。」 と 盛 り 上 が り 、 「 田 ん ぼ の オ ー ナ  
ー 」 を 募 集 し て み る こ と に な っ て し ま っ た 。  
思 い つ い た の が 3 月 。 役 場 の 新 年 度 予 算 は  
と っ く に 決 ま っ て い た 。 予 算 が な く て も 、 オ  
ー ナ ー さ ん か ら い た だ く オ ー ナ ー 料 金 だ け で  
賄 える 企 画 に す れ ば い い と 課 内 で 企 画 提 案 し  
た と こ ろ 、 案 の 定 「 予 算 は ど う す る ん や 。」 「  
金 払 っ て ま で 農 業 を し に 来 る も ん が 本 当 に い  
る ん か ? 」 と の 質 問 攻 め 。 し か し 「 予 算 は オ  
ー ナ ー 料 金 で 賄 い ま す 。 も し 応 募 が な く て も 、

地元の中学生在が田んぼの学校として無農薬のお米を栽培する圃場に仲間入りさせてもらうだけなので、困りません。」と上司を説き伏せ企画実施にこぎつけた。

お金のない中、外からお客様に来てもらうためには外に向けたPRが必要。関西・中京方面のマスコミをリストアップし、郵送料だけ捻出して記事掲載依頼のお手紙と募集要項を投げ込みしたところ、幸いにも大阪の新聞社が1社取り上げてくださって、定員10組をすぐに超える反響があった。

軽い気持ちで「やってみよう」と始まった企画が、思わぬ反響を得て、私を含め一緒に取り組もうと言ってくれた農家の方、そして何より役場の担当課のメンバーの意識が大きく変わった瞬間だった。

いざ、田植え当日。大阪からのオナーさんの言葉に更に励まされることになる。「意外と近いんですね!!」

「よし、やった!!」福井が、今立が外から

人に来てもらえる所だという「証」を得た。

< 農家に泊まってもらおう！ >

合併前の我が町は、ホテルや旅館のない町で、キャンプ場だったところに整備された宿泊研修施設が唯一の宿泊場所。当然そこにお泊りいただく予定だったのだが、なんと大胆にも間際になって、「農家に泊まりたい方がいたら、泊めてもらえますか？」と農家さんに提案。いとも簡単に「いいよ。」と行ってくださり、これが農家民宿の取り組みのスタートになるのである。

「こんな何にもないところに人が来るんやろうか。」と農家の母さんたちは口を揃えてそう言った。しかし「こののどかな風景や緑に癒されますね。」と喜んでいただき、農家のお父さんお母さんのありきたりの日常を「すごいですね。」と褒めちぎるお客様。「何にもないところ。」は都会の人からすると宝の宝庫、贅沢の極みなのかもしれないと思い始めた。

木造の広い家、どっしりとした柱、ゆった

りとした玄関と板の間。囲炉裏。中にはログ  
ハウスの農家もあった。都会から来た人はそ  
れだけで感激。とはいえ、初めて見知らぬ人  
を泊めることへの不安。どうおもてなしして  
いいかわからない戸惑い。やはりお客様にま  
ずかける言葉は「こんな何にもないところで  
ごめんなさいね。」だった。  
しかし、そんな農家のお母さんたちの不安  
や戸惑いは、いとも簡単にお客様が払拭して  
くれた。もちろん、とんとん拍子で取り組み  
が広がっていったわけではない。意気揚々と  
農家民宿に取り組もうとするお母さんたちと  
は裏腹に、「お前がやりたかったら一人で勝  
手にしろ。」というお父さんや「座敷にどこの  
誰かもわからんやつを泊めるなんてとんでも  
ない、絶対あかん。」と譲らないお父さん。農  
家民宿のスタートはなかなか多難であった。  
人を変えるのはそう簡単にはできない。自  
分が変わればそのうち人にも伝わる。元来人  
に頼みごとをしたり、任せたりすることが苦

手 だ っ た 私 だ っ た が 、 こ の 仕 事 を 始 め て か ら 、  
「 お 願 い 。 」 と 「 お 任 せ し ま す 。 」 で 農 家 さ ん と  
話 を す る こ と に し た 。 お 客 様 の 笑 顔 が そ の ま  
ん ま 農 家 の 父 さ ん ・ 母 さ ん の 笑 顔 に な る 。 私  
が 喜 び を 感 じ る 瞬 間 だ 。 そ う す る う ち に 、 初  
め は 絶 対 反 対 だ っ た 父 さ ん が 、 仲 間 の 呼 び か  
け で 仕 方 な く 一 組 受 け 入 れ て く だ さ り 、 こ れ  
ま た お 客 様 の 力 で 、 時 々 は 受 け て も い い か な  
と 言 っ て く だ さ る よ う に な っ た 。 今 で は 「 農  
家 民 宿 を や っ て 本 当 に よ か っ た 。 グ リ ー ン ・  
ツ ー リ ズ ム は 人 を 変 え る の お 。 」 と 満 面 の 笑 み  
で 語 っ て く れ る 。 最 近 、 そ の 父 さ ん の お 宅 に  
年 に 一 度 涅槃 団 子 を 作 る と き だ け 使 う 外 電 が  
あ る こ と が わ か り 、 お 客 様 の 希 望 で 竈 で ご 飯  
を 炊 い て も ら っ た 。 実 は ほ と ん ど 炊 い た こ と  
が な い と い う 父 さ ん だ っ た が 、 お 風 呂 も 薪 で  
焚 く お 父 さ ん は 絶 品 の ご 飯 を 炊 き 上 げ 、 母 さ  
ん の 作 る お か ず が で き る 前 に お 客 様 と ご 飯 だ  
け で 食 事 が 始 ま っ て し ま っ た と か 。 「 ま た 新  
し い 体 験 メ ニ ュ ー が 増 え ま し た ね 。 」 と 父 さ

んに話したら、また満面の笑みが返ってきた。  
そんな父さん母さんのところには、季節ごと  
に訪れるリピーターさんが何人もできている。  
しかし、役場で事務局をしていたころ、お  
父さんお母さんたちの底力に助けられっぱな  
しで、私は何にもしていないなあと、毎日後  
ろめたい思いをしていた。  
〈生涯の仕事〉  
そんな矢先、市町合併のうねりの中で、合  
併の相手先には、米粉の取り組みも、グリー  
ン・ツーリズムの取り組みもほとんど興味を  
示してもらえなかった。  
米粉の取り組みは、今立町の水田ビジョン  
の中で「米粉用の米」という転作作物を位置  
づけ、農家の栽培意欲と農業の継続をうたっ  
ていたし、グリーン・ツーリズムは中山間地  
域の農業振興施策として位置づけてきたのに  
…。このままでは地域の方と積み上げてきた  
取り組みがなくなってしまう…。  
行政がかかわる仕事というのは、担当者が

変わるだけで、いとも簡単にトーンダウンして立ち消えになったりする、そんな場面をこれまででもたくさん見てきたし、ましてや市の施策にもあげてもらえなかったら、本当になくなってしまうという危機感。

それまで、様々な地域の方々と一緒に取り組む中で、地域の力・人の力・守り伝えなければならぬたくさん地域の宝があると感じてきて、その宝を守るには「誰かが腹をくくって続けなければ!!」と、頼まれもしないのに、私がやらなければと思い込んだのだった。

農業の現場で汗をかいているわけでもない、口だけの自分。後ろめたさを感じながら旗を振ってきた私だったけれど、農作業の現場だけが農業ではない。それを加工する人、流通させる人、伝える人がいて、みんなが手を取り合って地域の農業が輝いていく。そんな姿を少し描けるようになってきていた。

私にできることは米粉パンを作ることと、人と人をつなぐこと。じゃあ、それを生涯の

仕事にしよう。と、そこまでの一大決心では  
なく、「勢いで役場を辞めてしまったような  
ところが大きかったなあ〜。」と今振り返って思  
うのだが、米粉パンのパン工房を切り回し、  
グリーン・ツーリズム組織の事務局長に専念  
するようになるのと、活動の範囲や人とのつな  
がりには遥かに広く深くなった。  
外から訪れるお客様に地域の良さを気づか  
せてもらう反面、地元の子どもたちが農業に  
触れていない、食とつながっていないという  
現実を知り、小学校の子供たちと大豆の栽培  
から加工まで、1年かけて取り組むこともは  
じめた。もちろん栽培のお世話は地元で大豆  
を栽培している農家さんで、加工の指導は地  
元農家のおばちゃんたち。私も指導している  
ような顔をしながら、実はひそかに子どもた  
ちと一緒に教えてもらっているのである。  
農家民宿や農業体験も、合併後に取り組む  
地域が広がり、環境調和型農業を目指す仲間  
がどんどん仲間入りしてくれている。これも

将来の農ある暮らしができるようになるため  
の授業料の要らない私の学びの場。  
体験のためだけの体験はしない。決して無理をしないというスタンスで取り組みをすすめてきたので、まだまだ、「金儲けではない人儲け」の域。ビジネスモデルには程遠い取り組みではあるが、ちょうどこの取り組みを始めるとき、「10年後に生き残るのは農家だぞ。」と意気投合してスタートした取り組みが、本当に農業の時代がやってくることを実感できそうなところまでやってきた。  
米粉の取り組みは国の政策で推進するまでになった。米どころの農家が安心してお米を作り続けられるようになることを願い、パンを焼きつつ、米粉の料理講習や体験を楽しみながらやっている。不思議なことに、子どもどころから、どちらかというと「パン派」だった都会育ちの私は、米粉のパンを作って食べ始めてから、すっかり「米派」になり、ご飯のおいしさに目覚めた。「日本人にはお米

でしよう。」と声を大にして言える。

< 田舎の底力を信じて >

しかし、思ったほど地域へ広がらない取り  
組み、取り組む農家の高齢化、もう少し儲か  
らないと後継者もできない。続かない。どう  
すればいいのかわからず、度々ジレンマを感  
じている。辞めずに役所にいたら、もっと行  
政側からできることもあったんじゃないかな  
どと、悶々と考えたことも少なくはない。

そんな中、3月11日の東日本大震災で、  
東北の皆さんの「田舎の底力」を目に焼き付  
けた。避難所で、薪でご飯を炊き、バケツリ  
レーで水を運び、地域コミュニティを崩さず  
に避難したいと訴える、田舎のすばらしさ。

「やっぱり田舎はすごい!!」と、改めてそん  
な田舎の魅力、農村の魅力にかかわるところ  
で、人生の仕事をさせていただけの幸せを噛  
み締めた。これからも、人と人、人とものを  
つなぎ続け、宝物を守っていかなくては。

< 私自身の農ある暮らし >

